

真珠島で活躍する若手海女

川又俊則 (鈴鹿短期大学)

kawamatat@suzuka-jc.ac.jp

はじめに

御木本真珠島では、昨年・今年と10歳代の若手海女がデビューし、新聞等多くのマスメディアが、練習からデビュー、その後も報道され、注目を集めている(資料1)。一方で、海女になる若い世代が少ないことも周知の通りである。「観光海女」を選択した若い世代の生の声は、「海女後継者」を考える基礎資料となりうると考え、6名の若手海女に約1時間ずつインタビューし、その結果を報告する。

1. 問題意識と調査の背景

(1) 海女後継者調査

本調査は「海女後継者調査」の一つとして実施。2012年6月、海女漁や海女文化の振興による地域活性化を目指す「海女振興協議会」が設立。同会は「海女後継者調査」を2012年度に実施中。

(2) 御木本真珠島の海女実演

2012年現在、2年目4人、1年目2人を含め合計15人が海女実演を行っている。

4月～11月上旬は9時20分から第1回、以後、16時20分まで毎時20分、最終回は17時の1日9回(冬季は17時の回を除く全8回)。1回の実演は約10分。海女船に乗り3～4名の海女が「海女スタンド前」に登場。海女紹介の後、海に飛び込み、4～5回海に潜ってアコヤガイなどを採る。

2. 調査方法

前回の海女研究会(8月27日)終了後、海の博物館石原義剛館長にご紹介いただいた真珠島博物館松月清郎館長にインタビューのご許可をいただいた。9月から10月にかけて、6日間、1日1人ずつ、彼女たちの勤務時間内に、真珠島博物館内でインタビューを行った(表1)。

インタビューの冒頭で、筆者は自己紹介し、今回のインタビュー項目(資料2)を彼女たちに明示し、基本的にはその内容を聞き取った(明示した項目すべてを聞き取っていない場合もある)。許可を得て、インタビューは全てICレコーダーに録音した。それを文字起こしし、編集作業で7～8の小見出しでまとめた(本研究会では、そのインタビュー資料は回覧のみとする)。

表1 インタビュー日時

海女	インタビュー日時
A	10/9(火) 9:04～10:10
B	10/10(水) 9:05～10:15
C	9/11(火) 9:10～10:40
D	9/13(木) 9:05～10:10
E	9/21(金) 10:03～11:10
F	9/27(木) 9:02～10:10

3. 結果

(1) 属性

出身は県内5人(伊勢・鳥羽・志摩等)、県外1人。最終学歴は高卒5人、大卒1人。部活で体育系が4人。全員が小さい頃から泳げた。

(2) 動機

Aさんは、高2で御木本真珠島の求人を見て、海で働ける地元の就職先として選択。同窓の先輩(Fさん)がいたことも安心感を与えた。

Bさんは、鳥羽市相差町の海女旅館に両親と泊まりに行く。自分が海女になれるかどうかを尋ね、「(親戚などでない)こちらでは無理ですね」と言われ、同時に、御木本真珠島の海女のことを教えてもらった。すぐに調

表2 対象者の属性等

海女	年数	出身地	高校部活等
A	1年目	志摩市	陸上部
B	1年目	京都市	水球部
C	2年目	鳥羽市	バレーボール部
D	2年目	鈴鹿市	なし
E	2年目	伊勢市	水泳部
F	2年目	伊勢市	ギター部

べ、御木本真珠島を訪ね、先輩たちのデビューを見て入社を決意。

Cさんは鳥羽市出身で「海が遊び場」の生活。企業見学で真珠島の海女実演を初めて見て、「脚がきれいに揃って潜っている姿がきれいで感動」し、自分もやりたいと思った。

Dさんは鈴鹿出身だが、鳥羽市で暮らす海女の祖母の所へよく行き、祖母の潜り真似をしていた。中学生の頃から「将来、海女になる」と周囲に言い、高1で、御木本真珠島のことを母に聞き、高校の進路と相談しながら決めた。

Eさんは、体育教師を目指して大阪の体育大学に行くも、教職から方向転換し、地元での就職・海での仕事を考えた。昔見た御木本真珠島の海女ドキュメンタリーを思い出し、入社試験を受けて合格した。

Fさんは、「高3の7月に求人票のなかで見た『海事係』に興味を持った」のがきっかけ。海好きだったため、「海に潜れるんだったらそこにします」と宣言して、試験に無事合格した。

海・泳ぐのが好き、海女になりたい、地元で就職したいなど。

(3) 成長過程

①練習が始まるまで

入社以降は5月中旬まで、御木本真珠島社員として、会社全体のこと、真珠や商品知識を基礎から学ぶ。販売・接客の基本を学び、博物館や営業などの部署を廻って研修。

②練習開始

5月中旬から7月中旬まで練習。平日の午前・午後1回ずつ。1回の練習は20分、週3回。場所は、3～4mの深さの海（海女船を乗降する海女棧橋周辺の海）。

見せるために潜ることに慣れてない彼女たちは、「思ったより、結構しんどかった」。

ウェットスーツ（+鍾）による練習。手のかき方が正しくないため深く潜れない人、磯メガネ、耳抜きでの苦勞も。同期のなかで進捗状況に差も生じ、遅れている人たちにはそれがプレッシャーにもなる。

③足を揃える・潜って採る

「足を揃える」ことについては、全員が、練習当初に強く意識。

潜って採る練習は、最初、先輩海女さんが白い石を海に投げて落としてそれをとることから始めている。それができるようになると、次に、潜って実際に見えるもの（サザエ・ヒトデなど）を採る。

④海女スタンド前の練習

本番さながらの練習は7月に入ってから（ウェットスーツを脱いで練習）。毎時30分までの実演後、毎時35～45分に本番の一連の流れを練習。スタンド前はそれ以前の場所と比べ、「潜りやすさが全然違った」。「岩もあって、貝もあって、魚もいっぱい見える」ため、「何もない世界からきれいな世界に来た感じ」とはAさん。ただし、潮の流れが速く、「頑張って泳がないとね」と先輩に励まされた。

「浮かんできて、全く逆向き」ではまずいが、彼女たちは、最初、浮上してくるとき、「あれ、ここどこやろ」と自分の位置がつかめなかったこともあった。

⑤デビュー

4名は昨年の7月17日にデビュー。真珠島の大イベントで多くのマスメディアや観客が集まる。緊張で「真っ白になった」彼女たち。だが、無事にデビュー。

今年は7月22日。Aさんは、「緊張したけど、嬉しく楽しかった。そのときは、潮の流れが止まっていて、4回潜って、なんとか見つけられてよかった」。Bさんも、「貝を見つけることができなくて、何か取れないとマズイと緊張」した。直前の練習では、「見つけられなくて上がったこともたまにあったので、そうだったらどうしよう不安」。だが2人は無事に貝をとることができ、喝采を浴びた。

⑥夏から秋、冬へ

経験を重ね、色々なものが見てくる。Aさんは「海底の地形は、2か月たってだいたいつかめてきた」。ひと夏の潜りは、彼女たちのスキルを大きく向上させる。他の人たちも同様。Fさんは、「最初は魚がいても気づかなかったりとか、サザエがいてもただの石に見えていたのが、だんだん、どこにあるのか見えるようになってきた」。

夏から秋、そして冬にかけて、「水質がきれい」になる。「ほぼ毎回（何かを）とれている」。そんなEさんは、「一回の潜りで、サザエが近くに三つあったときにとったことが最高記録」。だが、「(ベテラン海女は) サザエも何かもと何種類も一回でとることがある」ので、自分との差を感じている。

毎日潜る彼女たちは、「最初の頃より息もだいたい長くなってきた」と実感。Dさんは「最初は、潜って底について獲物を見つけたら浮かぶけど、今は、底にたどり着いたときに探す余裕がある」。Bさんも「息の続く感じとかも違う。最初は潜っても息が続かず、すぐ上がってきたけど、今では1分くらいは大丈夫」。「最初は、貝を採るのに集中して、それだけだったけど、今は、潜って、そのまま周りを見たりとか、苦しくなるまで『変な獲物いるかな』と探ったりする余裕ができてきた」。

ある程度、足がきれいに揃えられ、また、獲物も採ってくるができるように彼女たちにとって、もう一つの大きな目標は「磯笛」。「練習しているけど、お客さんに聞こえているかどうかわからない」「まだ出ていないと思うので、練習して大きなのを出したい」と全員（実演を見ていると、ある程度出ている）。

⑦後輩を迎えて

Dさんは「慣れてきたことで油断が注意」。潮の流れが急なのに、油断して、「泳げるからいいや」と（ひもを結ばないで作業していたら）流れてしまったことがあるという経験を指す。「油断はだめ。泳げるからといっても、実際は泳げない（くらい急な）流れの時もある」という。

Fさんは、「後輩たちは、船で帰るとき、お客様が振り終わってもまだ振っていた。たぶん、私も一年前はそうしていたのに、いつの間にか振り終わったら手を下していた。ずぼらになっていたと思われた。初心に戻ろう」と反省の弁。

⑧ベテランたちとの差

彼女たちの上世代は、年も経験も相当開きがあるベテランばかり。

「脚とかきれいに潜っていくことは負けていない」けど、「自分たちは息が短く、磯笛の音も小さい」とCさん。Eさんは、「海女作業の動きが素早い。次何をしたらいいのかというところがわかっていなかった。次の動き、先のことを考えて動いているのがすごい」。先輩たちと自らの技術の差を理解し、少しでも近づきたいと述べている。

(4) 技能の伝承

①「観光海女」の指導

教え方は各人異なる。言葉を噛み砕いて説明するより、自らの姿を提示したり、ポイントを短い言葉で表現したりという場合が多い。

「上の人ら（ベテランの人ら）は、自分たちのわかっている言葉で説明」し、また、「単語みたいなポツと言った言葉、短い言葉が多い」。「アクセントや単語が違う」というのは、鳥羽・志摩出身のベテランと伊勢出身のEさんも違う。早口のベテランの言葉は、「方言がきつい」と聞こえてしまうこともある。Eさんは、とくに京都出身の後輩（Bさん）などには、「(ベテランが) 言いたいことを、自分たちの経験をもとに「通訳」して説明している」。

②獲物

真珠養殖のアコヤガイが基本。サザエ、ウニ、ナマコ、大アサリ、ワカメなどの海藻、ヒトデ、タコなど。

「何もないなと思ったときは、たまに、岩にある海藻をちぎったり、石を持っていたりすることも。何かは採っていく」とCさん。

Fさんのこだわりは、「貝をとってきて、スポンと桶に入れてしまう人もいるけど、私はできるだけ見えやすいように、たとえば、サザエだったら、ゴツゴツした殻の部分は見にくいので、口の部分をお客様に見えやすいように持って見せてから桶に入れるようにする。何をとったかお客様にわかるようにと心がけている」。

③危険からの回避

生物では、オコゼ、(脚が長い茶色の)クラゲ、ハネ(シロガヤ)など。とくに刺すものについて、「(先輩が)刺された」との経験談にもとづく、助言。彼女たち自身は「救急車に運ばれた」経験はないが、過去の事例を聞いて、気を付けている。「潜ったとき下にいたので逃げた」「2度見た」など。

台風などの翌日、海が「茶色く濁り、何も見えない」状態が危ない。流木もあるし、何も見えない中で潜るのはたいへん。また、大潮や時化のときなど潮の流れが速く、「同じ位置に留まっていけないといけなく、流されてしまう」こともある。

素手素足で潜るので日常的に怪我が絶えない。Aさんは「貝同士でくっつくので、力入れないと採れない。そのときにアコヤガイのギザギザで切ってしまう。意外と深く切るので治りにくい。血も半端ない」と述べている。また、海面に上がるときに、「石を蹴ったりして切ってしまうことも」「手でかいたとき、岩をガリっとして切る」こともある。Bさんは、実演中に切ってしまった場合、「お客さんに見せないように」しつつ、「血だらけのまま作業を続ける」。そして、「向こう(スタッフルーム)に行って消毒して、絆創膏を貼る」と言う。

(5) サービス業としての観光海女

海事係として海女実演は、たとえば、9時から準備して9時20分から30分まで実演、それが終わると10時までに、洗濯や風呂、着替えなど終えねばならない。1日3回の実演(準備から片付けまで含めて1時間)以外、彼女たちの勤務の大半は陸上での勤務。ほとんどがお客様相手の仕事。

一日の勤務例は次の通り。8時半開演。9時から10時まで「海の時間」。10時から御木本幸吉記念館のフロント、11時から30分休憩(昼食)、11時30分から12時まで銅像の前で写真(お客さんの撮影ポイント)担当。12時から13時まで博物館(企画展示の前)で誘導。13時から14時まで記念館、14時から15時まで海の時間。15時から15時30分まで休憩、15時30分から16時まで写真、16時から17時まで記念館など。

接客については、先輩海女からの指導も具体的。「アコヤガイを見せたときは笑顔で」「写真を撮っている人がいたら、そっと長めに見せる」「お客さんが見えなくなるまで手を振り続ける」「終わって船に乗るときも笑顔で手を振る」「お客さんに給料をもらっているつもりで、お客様を大事に」など。Dさんは「お客様に接するのが自分たちの仕事なので、笑顔で写真を撮ってくれたらうれしい」と言っていたが、他の方々も同様。

4. 考察

(1) 4区分

経験の差異で「若手」「ベテラン」、海女の種類で「観光海女」「海女」と分類するならば、右図の通り。

本調査は「若手・観光海女」(V)にインタビューした結果。すべてのカテゴリー(W, X, Y)での調査で「海女後継者」の諸問題がより詳しく見える。だが、VからW、VからXと展開するコースもあることが推察される(実際にある)。

表3 海女の4区分

	観光海女	海女
若手	V	X
ベテラン	W	Y

(2) 成長過程

「入門」「初級」「中級」「上級」の4つに区分してみると次のようになる。

「入門」は、海に顔をつけられ、海に潜れる段階。6名はすぐにクリアしている。

「初級」は、海に潜れるものの足が揃わない段階。この段階では、海中の作業でも足を揃えられない。ただし、海底の貝を拾える。この段階では、磯笛はほとんど出ない。潮の流れが速いと、態勢を保てない。デビュー前の練習がこの段階。デビュー直後、この段階に戻ることもあるが、デビュー時点では次の段階であることが望まれる意識が、ベテラン海女から若手海女まで共有されている。

「中級」は、観光海女として足を揃えて潜れることが必須の段階。その技量があれば、海底の様子がある程度わかる。海中・海底のさまざまな種類のものを採れる。磯笛も少し出る。潮の流れが速くても、その場で維持できる。

「上級」は、彼女たちはまだ達成していない理想の技量を持つ段階。潮の流れに関係なくきれいに潜れる。場に応じて、さまざまな種類のものを採れる。磯笛が大きく出る。

御木本真珠島の観光海女は、先輩から後輩へ技能の伝達がなされている。「きれいに見せる」ことが重視され、「見せる」海女として、練習の場で「見る」先輩たちから、自らの欠点を指摘され、それを直すべく努力を続ける。

Aさんは、先輩たちの海女デビューを見学し、初めて海女作業を見て、「(先輩たちが) 格好良く、(貝を) とつてくるときの顔とかすごいと思って、早く自分もやりたい」と気持ちが高ぶった。入社前から目指す目標になっている。

(3) 海女になる

- ①技術の差：「潜ること自体は一緒だけど、「地元海女」はそれぞれの地元で違うところもある。潜って出荷してという海女と自分たちとは違う」という意識あり。
- ②外部参入者の受け入れ：海女漁をしたいという希望もあり、実際になった若手がいることも知っている。
- ③海女漁での生活可能性：「生計を立てられない」なら、堅い公務員や会社員を選ぶだろう、とも。

(4) 都会志向の若い世代

彼女たちの同級生・同世代の多くは、地元に残らず、大阪や名古屋へ進学・就職している。彼女たち自身は、「都会に会社があり、地元には田舎なので、都会へ出たい子が多い」と説明する。

ただ、その一方で、Dさんは「若い世代で海女が少ないのは仕方がない。でも、海女が増えてほしいと思う」とも述べている。「海女存在をもっとみんなに知ってもらいたい」とも言う。

自分たちと同じように「泳ぐことが好きで海女になりたいと思う子もいるかもしれない」が、現在はそれがうまく同世代に伝わっておらず、「海女になりたいと思っても、どうやったらなれるのかわからずに悩むのが現状」との認識。Dさんは「自分のいままでの友人知人では、海が好きで海女になりたいというような人はいなかった」とも言う。だから「小さい子たちに海女さんをアピールしたい。こういう仕事をする人だと伝えたい」。

Aさんは、「若者は都会志向で田舎から都会へ出ていく。若い人がどんどん減ってきている。小中学校の同級生は、半分が地元、半分が名古屋や大阪へ行った。専門学校を卒業してそのまま就職したと聞いている」という。大阪での生活を経験しているEさんは、「若いうちは都会へ憧れる」と述べる。「海女の仕事はきつい。生計を立てられない」「獲物を獲れないと食べられない」「だったら堅い、公務員や会社員などをみんな選ぶ」という。彼女自身も一度は考えたくらいである。

おわりに

彼女たちは(単純計算で仮に1日3回×1週間に5日×50週として)1年間に750回(×1回10分のうち4~5回)も潜っている。その経験を積み重ねるなかで、技術が向上し、「見せる海女」として、泳ぎや潜り方がきれいになるばかりではなく、海女としての技術(海中での目・獲物の採り方・磯笛等)も上がっていく。

彼女たちの語りで示されたこととして、先のX(若手海女)を増やすためには、(確認に過ぎないかもしれないが)、①海女として地元外の人びとの受け入れを行うこと(とそれを周知すること)、②他職との兼業を含め、海女の生活が成り立つ可能性を示すことがポイントの一つになるだろう。海での仕事を希望する若い世代もいる。現に、Bさんのように三重県外からそれを求めてやって来る例もある。また、伊勢・鳥羽・志摩市などの地元の若い世代が就職先で地元を選べるのは、御木本真珠島が観光海女を1951年から続けているということも大きな要因である(昭和50年代の新聞報道(回覧資料)で改めて確認した)。

彼女たちの中には、観光海女を追求したい人も、可能であれば、将来展望として、海女漁を視野に入れている人もいる。(外部者の勝手な見解として)海女技術を持つ彼女たちが、観光海女から海女漁へ転じた姿も見てみた

い(し、すでに諸先輩たちで実際にそうなっている方もいると聞く)。もちろん、彼女たちが観光海女として活躍し、それは、Eさんが望むように、三重県や東海圏のみではなく、その存在が(再び)全国に知られ、そして、全国各地にいる潜在的な海女希望者の呼び起こしにつながれば、もっといいのだろう。

彼女たちのさらなる活躍を期待して、本報告を終わりにする。

参考文献・URL

『compass』21号、4-5 ページ、2012年(回覧資料参照)

『NAGI』50号、18-19 ページ、2012年(回覧資料参照)

御木本真珠島 <http://www.mikimoto-pearl-museum.co.jp/>

資料1 2011～2012年の若手海女を扱った主な新聞記事

掲載日	内容	掲載紙(注記以外は地方版)	回覧資料
2011年	5月14日他 練習開始	中日、伊勢、朝日、毎日	■
	7月13日 アコヤ貝放流	伊勢	
	7月9日 もうすぐデビュー	読売	
	7月19日他 デビュー	中日、朝日、毎日	■
2012年	1月26日他 善意の箱	中日、伊勢、読売	
	1月31日 凍える海に潜る	毎日	
	2月7日 磯着手作り	中日、朝日	■
	4月15日他 アラメ放流	伊勢、毎日	
	5月4日 特集・海女	産経	■
	5月23日他 練習開始	中日、伊勢、読売、朝日、毎日	■
	6月18日 特集・中部発	中日夕刊	■
	7月9日 練習	読売	
	7月12日 アコヤ貝放流	中日、伊勢、読売、毎日	
	7月22日 特集・磯笛が聞こえる	読売・中部発	■
	7月23日他 デビュー	伊勢、朝日、読売他	■

※ ■は資料として回覧

資料2 インタビュー項目

- ご自身のこと：居住地・出身地・同居構成(世帯主との続柄)と漁業で収入を得ている人がいるかどうか・親(祖父母)の職業・最終学歴・小さい頃(中学生以下)の海潜り経験・海女になったきっかけ(理由)・小中高時代における海女・海・体育・部活動・就職活動に関して・なぜ真珠島へ採用されたと思うか
- 海女のこと：海女としての「一人前」とは・海女になってよかったこと(つらかったこと)・海女になる前に気づかず、なって気づいたこと・海女として、現在困っていること・技術の取得について・今年の今頃と何が違っているか・海女漁をしている人びととの交流・現在の海女漁への関心・将来の海女漁への意識
- 真珠島・海女のこと：一日(一週間、一か月)のスケジュール(例)・一週間(一か月、一年)で、どの程度(何回)潜るのか・何をどのくらい獲っているか・何を獲りたいか・先輩から言われて覚えている言葉・同期の存在・後輩の存在・「ユニークな紹介」について・心がけていること・失敗談、成功談・どのような海女になりたいか
- 御木本真珠島のこと：海女以外の仕事・真珠島の観客・同期の海女以外の友人たち・昨年と今年・三重・鳥羽・志摩について
- その他

※インタビューまとめは回覧

以上